

## 鴨沓／かもくつ

(財)遺芳文化財団

日本はきもの博物館学芸課長 市田京子

『日本書紀』の皇極天皇記によると、中臣鎌足は、打鞠（まりうち。後の蹴鞠）をする中大兄皇子が飛ばした皮鞋を拾うことで皇子と出会ったといい、すでに蹴鞠に類する遊戯が行われていたようである。蹴鞠は平安時代に盛んに行われるようになり、室町時代になると、公家だけでなく、武家も盛んに楽しんだという。

競技は四隅に桜・柳・楓・松を植えた鞠庭で行われ、鞠足と呼ばれる競技者8人が対角線上に向き合って立ち、鹿革で作った鞠を地面に落とさないように蹴り続ける。時間を計って勝敗を競うのではなく、出来るだけ長く蹴り続けるために協力し合うことを楽しむもので、美技には手に持った扇で袴をたたいて賞賛をおくった

の背革を用い、黒漆を塗った。底は象革と言われる厚い牛革が、鞆には鹿の揉み革が用いられている。

京都市の下鴨神社の沓は、白地に青の模様を染めた鞆が付けられている。甲は内縫いで縫い合わせ、厚い底革には足にしなうように切れ目を入れてある。甲と底は、中底を入れて、両サイドでは3ミリ程の幅の革紐で内縫いに、爪先と踵部は麻のような糸で外縫いに綴じ付けてある。鞆もやはり革紐で縫い綴じられている。江戸時代。長さ24.6cm×幅10.4cm×高さ20.0cm。

香川県金毘羅宮の沓は、濃い紫に染めた鞆が付く。甲は縫い目の見える外縫いで、底革には2本の切り目が入る。ただ、前方の切り目は固



下鴨神社の鴨沓



金毘羅宮の鴨沓

という。

ただ、競技として確立してくると、身に着ける装束の規定が厳しくなり、着用には宗家による許可を必要としたという。この制約があることで、かえって装束が変化せずに踏襲されることになったと考えられる。

装束には、鴨沓と呼ばれる鞠を蹴る沓も伝えられている。堅い革で作った浅沓の履き口に柔らかい革を筒状に合わせる鞆（べつ）を付けたもので、長い紐で巻き締めて履くようになっている。古くは襪（しとうず。指股の分かれな足袋）と沓を用いていたものを、足にしっかり固定できるように一緒に合わせて、蹴鞠専用の沓として作られたようである。甲には緻密な牛

定されてしなわない状態である。底革は後半部では2枚重ねにされており、接合には革紐と丸釘が用いられている。昭和30年代。長さ28.8cm×幅10.7cm×高さ22.0cm。

「かもくつ」の名は、この沓の爪先が、元は高く膨らんでおり、それが水鳥のカモの嘴くちばしに似ているとして付いたとも、京都の賀茂の人たちが使い始めたから付いたともいう。「カモの嘴に似るから」とすると、こちらは「duckbill」とカモノハシという動物であるが、15世紀中頃のヨーロッパの、広く膨らんだ爪先の中央だけを尖らせた靴の呼称と相通じている。鳥獣の姿がデザインを生んだ訳ではなからうが、呼称を生む発想の相似がおもしろい。